∞∞∞

父娘の赤い糸、赤い絆が行間にも溢れている。実はこれは愛犬アリスの紐なのだが。私もがんに罹ってわかったことだが、平凡な日々が平凡に終わるのが心地良く、穏やかな朝を迎えられることに感謝してしまう。由紀子様のこの文章も私のお気に入りである。「不良病人」より、抜粋する。2010 年 10 月頃のことである。

『父は左手にアリスのリード、右手に杖を持ち、私は杖をもった父の右腕を支えて歩く。親子水入らずのこの散歩は、私にとって実に愛おしい時間だった。それは幼稚園から母親と一緒に家に帰る園児の気持ちに等しい。父と共に歩きながら、いつまでこんな貴重な時間が持てるだろうかと、かつての母の手の感触を思い出しながら考えていた。』

インフォームド・コンセント後の鬼六先生のお気持ちは。「残日録　春」より。

『１ヶ月近くもかけて検査した結果、手術のできるガンの状態であり、体力にも問題がないとわかったのに、その道の権威である担当医に向かって、なおも手術を拒否したということが、息子も娘も腹立たしかったようだ。

３年前、透析を導入することによって生き永らえたが、実はあの時点で私の寿命は尽きていたんだ。75 歳から 78 歳までの 3 年間、この世に余分に生きられたことを大いに感謝している、と私は 45 歳の息子と、40 歳の娘の顔を交互に見ていった。だから何だって言うんだよ、それ以上、寿命を延ばすのはおかしいというのか、と息子は私に向かって怒ったような口ぶりになった。「おかしい」と、私ははっきり言った。「親を無理矢理生きさせる事を、親孝行と思うな。」』

また、『仕事するために生きるのではなく、死なないために生きる、ということは人間の生き様の中で、何とも空しいものであることをつくづく痛感した。』とも記されている。

これに対し、由起子様の答えは。「手術は、しません」より。

『ーそうだ、父はこれでいい。私がするべきことは、父が「うまく生きられる」ために、力を尽くすことだ。』

今の由起子様のお気持ちは。「はじめに」より抄出。

『周りの人がどんなに慰めてくれようと、この手の悔恨の思いは、必ずついてまわる。私も例外ではなく、四十九日が過ぎた今もなお、父を思えば、悲しさと後悔で打ちひしがれる。父の「手術はしない」という意志を尊重したことだって、「ひょっとしたら…」と悔恨のタネになる日もあるのである。そしてひとしきり泣いた後、かつて父が口にしていた様々な言葉をジグゾーパズルのように思い出し、なんとか正常な心を取り戻している。』

私の患者様の長女さんも 10 月末、「最期は安らかでした。お世話になりました。」と挨拶に来られた。明るく振舞われていたが、目には光るものがあった。同じお気持ちであったのであろう。

理事　井上 林太郎